

『葉隠』も読み継がれ、人としてのあり方を教えてくれる
大慈悲の心で



今から300年ほど前にまとめられた『葉隠』は、武士道の書として知られています。しかし、現代の私たちの心にも響く生活哲学が書かれています。

調べてみよう
なぜ人々は『葉隠』に心動かされたのだろうか？



『葉隠』写本 佐賀藩で読み継がれていた『葉隠』の写本です。

(佐賀県立博物館・佐賀県立美術館提供)

『葉隠』と佐賀藩

『葉隠』は、江戸時代中期に書かれた書物です。佐賀藩士山本常朝が武士としての心得を口述し、それを田代陣基が筆録したものです。全11巻で、『葉隠聞書』とも言われています。『葉隠』では、佐賀藩士としてあるべき心・姿を示し、「大慈悲の心」を重んじて

COLUMN

『葉隠』の名前の由来

書名の由来には、諸説あります。例えば第11巻の「すべての人の為になるは我が仕事と知られざる様に、主君へは蔭の奉公が真なり(中略)陰徳を心がけ陽報を存ずまじきなり」(蔭の奉公や徳を重んじ、自分の功績を現すことを競うようなことがあってはならない)からきている説。常朝の庵のある地域に「葉がくし」という柿が多くある説。平安時代末期の歌人西行の和歌によるという説。広く世の中の人々に読ませる書ではなかったので「葉隠」と言ったという説などがあります。

います。その思想は多くの人に影響を与え、今も読み継がれています。

『葉隠』の誕生

佐賀藩2代藩主鍋島光茂が没してから10年後の1710(宝永7)年、金立山(現在の佐賀市金立町)の麓にある庵に一人の佐賀藩士

が訪ねてきました。庵の主は、山本常朝です。長年、光茂の側近として仕えてきたため光茂が没した時に殉死を願ったものの、殉死禁止令によって断念し出家した身でした。

金立山を訪れたのは3代藩主綱茂と4代藩主吉茂に仕えてきた田代陣基でした。

田代陣基が山本常朝の元を訪れて以後、山本常朝が庵を大小隈(現在

の佐賀市大和町)に移した後も合わせて、およそ7年間にわたって常朝の言葉を聞き取り、11巻にわたる『葉隠』をまとめることとなります。

常朝の思想に大きな影響を与えたと言われているのが、鍋島家の菩提寺である高伝寺(現在の佐賀市本庄町)第11世住職の**湛然和尚**と、長年神道・儒学・仏教を学んできた佐賀藩士**石田一鼎**だとされています。

当時は江戸幕府が開かれて100年ほど経ち、戦乱の記憶も遠ざかった平和な時代でした。藩祖鍋島直茂の時代からみると武士



常朝先生垂訓碑
現在の佐賀市金立町にあります。「葉隠発祥の地」と呼ばれています。

(佐賀市教育委員会提供)

『葉隠』四誓願

- 一、武士道に於ておくれ取り申すまじき事
(武士の道においておくれを取らないようにすること)
- 一、主君の御用に立つべき事
(主君のお役に立つこと)
- 一、親に孝行仕るべき事
(親孝行をつくすこと)
- 一、大慈悲を起し人の為になるべき事
(大きな慈悲の心で人のためになるようにすること)

COLUMN

門外不出の秘本!?

『葉隠』の前半には、佐賀藩の伝統的精神に基づく教訓や藩祖直茂、初代勝茂、勝茂の子忠直、2代光茂、3代綱茂らの言行が述べられています。後半には、佐賀藩士たちの逸話や史跡・伝説などを集めて述べられています。個人の実名などが挙げられ、差し障りもあったことから常朝は陣墓にこれを焼き捨てるようにと命じていましたが、佐賀藩士たちの間では、写されて読み継がれていました。

の思想・生活は大きく変化し、武士の生き方にも戦国時代の武勇・剛健の気風が徐々に薄れつつありました。

そんな時代、常朝は『葉隠』によって、佐賀藩の武士はどうあるべきか、「常に己の生死にかかわらず、正しい判断をせよ」と説いています。

『葉隠』には、冒頭に「佐賀藩の家臣たるものは、藩の歴史・伝統

を知ることが肝要」とあって、常朝の思想や藩主・藩士などの言行・逸話が書かれています。

現代に生きる大慈悲の心

葉隠の四哲



(通天寺提供)

山本 常朝

1659(万治2)年~1719(享保4)年



(通天寺提供)

湛然和尚

不詳~1680(延宝8)年



(通天寺提供)

石田 一鼎

1629(寛永6)年~1693(元禄6)年



(通天寺提供)

田代 陣墓

1678(延宝6)年~1748(寛延元)年

湛然和尚、石田一鼎、山本常朝、田代陣墓の4人は「葉隠の四哲」と呼ばれています。湛然和尚は鍋島家の菩提寺・高伝寺、第11世の住職であり、石田一鼎は佐賀藩武士道の開祖ともいふべき人で、佐賀藩第一の学者と言われた人物です。常朝はこの二人の教えを受けました。「四誓願」は、石田一鼎の「三誓願」に影響を受け、これに湛然和尚の慈悲の心を加えたものだと考えられています。

葉隠に記載されていること(一部抜粋)

(出典 栗原亮郎著「校註 葉隠」)

大難大変に逢うても動転せぬといふは、まだしきなり。
大変に逢うては^{かんぎやく}歡喜踊躍して勇み進むべきなり

(開巻1-116)

何事も成らぬといふ事なし。一念起ると、天地をも思ひほがすものなり。成らぬといふ事なし。人がかひなき故、思ひ立ち得ぬなり。力をも入れずして、天地を動かすといふも、只一心の事なり。

(開巻1-144)

恋の至極は^{しこく}忍恋と見立て^{そうろう}候。逢うてからは恋のたけが低し。

(開巻2-205)

^{たんできたいま}端的只今の一念より外はこれなく候。
一念々と重ねて一生なり。

(開巻2-220)

^{なりどみひようこ}成富兵庫申され候は、「勝ちといふは、味方に勝つ事なり。味方に勝つといふは、我に勝つ事なり。
我に勝つといふは、^{たい}氣を以て體に勝つ事なり。」

(開巻7-831)

『葉隠』の思想内容をよく表しているのが「**四誓願**」だとされています。

武士道では、人に負けない心を持つこと、主君の役に立つこと、親に孝行をすることに加え、あらゆる人を隔てなく大切に思う「慈悲」の心が大事であり、人のために尽くすようにと説いています。人として生まれたからには、人や世の中の役に立つことは、時代が変わっても求められる人としてのあり方といえます。

『葉隠』では、「武士道と云うは、死ぬ事と見付けたり」という一節が非常によく知られています。この言葉の真意は「私心を捨て覚悟をもって

公務に尽くすこと」「^{しりしよく}私利私欲を捨てること」と解釈され、決していたずらに死を求めものではないとされます。むしろ、立派に自分の仕事を成し遂げるための心得を述べたものと考えられます。

『葉隠』には「勝つことは、自分に勝つこと」「願えばかなう」など、現代にも通じる考え方が示されています。およそ300年前の山本常朝の言葉は、現代の人にも影響を与え続けています。

学校の取組

【金立かるた】

■佐賀市立金立小学校

金立小学校では郷土を題材にした金立かるたで、地区の方との交流を深めています。



調べて書いてみよう!

『葉隠』の内容を調べて、気に入った文章を書いてみましょう。



読んでみよう!

『葉隠』
岩波文庫など

『校註 葉隠』
青潮社刊



出かけてみよう!



通天寺 (佐賀市大和町大字松瀬2142)

湛然和尚の彩色座像や山本常朝などの肖像画が飾られています。

TEL 0952-63-0029

(通天寺提供)



龍雲寺 (佐賀市八戸1丁目6)

墓地には「旭山常朝庵主」と刻まれた墓があります。(「旭山常朝」とは、常朝の法名です)

TEL 0952-24-1712

(佐賀市教育委員会提供)

検索してみよう!

龍造寺

佐賀城

